九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アルマン少年の出来事 : ダミヤン事件の示す18世紀における王と人民の関係

阿尾, 安泰
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5426

出版情報：言語文化論究. 15, pp.61-69, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

アルマン少年の出来事 — ダミヤン事件の示す 18世紀における王と人民の関係

阿 尾 安 泰

フランス絶対王朝を築いたルイ14世の後を継いだのが，ルイ15世である。この王について考えてみたい。ルソーは晩年自己の正当性の弁明のために『対話』という作品を書くが，その原稿をノートルダム寺院の大祭壇に捧げることを考える。そうしなければ，書いたものが悪意ある人々の手によって改竄されてしまうというのである。摂理に委託することで，状況を打開しようとする。だが，この計画は結局内陣に至る所の柵が閉められていて，進むことができず失敗に終わった。この企てについて，ルソーは註をつけて，以下のように述べている。

> (……) 聖壇に委託するという思いつきは，ルイ15世存命中に浮かんだもので，当時としては幾分なりと滑稽な感じの少ないものであった。[1)]

ここにルイ15世が登場する。ルソーは自分が依拠し，その正当性を確保してくれる対象として，この君主を選択している。晩年の被害妄想の闇の中で，彼を救ってくれる光となるのである。しかし，この君主は，闇の力に襲われてもいる。1757年に王は，ダミヤンの太刀を受け，危うく一命を落としかけるのである。王に注目するルソーは，この悪の存在たるダミヤンにも目を向けないではいられない。彼は，自分をめぐる大規模な陰謀の存在を想定し，そこで自分がダミヤンの共犯者とみなされているというのである。[2)] このルソーのビジョンにおいては，ルイ15世とダミヤンが光と影を具現する人物となり，彼を取り巻く壮大な党争劇が思考されていく。ここでは，この哲学者が提示しようとした体系の非現実性ないし病理性を主題として，論を進めようとは思わない。ルソー個人のドラマと向きあう前に，この君主がいかなるイメージ表象を当時の人々に喚起したのかを，まず考えてみたい。ルソーを巡る問いかけはその考察の後になされるべき問題のように思えるからである。ダミヤンが引き起こしたこの事件が，いかなる渦を巻き起こしたのかを，これまで余り言及のなかった資料の中から追求してみたい。

1：アルマン少年の登場

1757年1月5日，ヴェルサイユで馬車に乗り込もうとするルイ15世は，一人の暴漢に背後からナイフで襲われた。王は冷静にその男の逮捕を命令した。王の傷は致命傷ではなく，後に回復することとなる。ダミアンという男の犯行であった。事件後速やかに捜査が開始

される。男の身元が判明し，動機と共犯者の探索が大きな目標として掲げられ，大規模な捜査網がフランスを覆うことになる。[3)]

特に共犯者に関する情報は執拗に収集され，多くの人々が拘束，逮捕されていった。こうした司法警察側の動きをよく示す資料として，現在アルスナル図書館に所蔵されているバスティーユ関係の書類がある。これはダミヤン関係の書類を分類しているとされるが，ダミヤン本人に関するものは余り多くはない。この資料の中に，登場する少年がアルマンである。[4)]

記録にその名がはじめて登場するのは，1757年４月18日付けの資料であり，分類番号は297番となっている。そこにおいては，アルマンという名の少年が王に対して不穏な発言をしたと報告されている。アルマンは王が死すべき運命にあると友人に告げ，そのことを他言しないようにと語ったのである。この知らせを受け，警察機構が行動を開始する。この不穏な発言を聞いたバランという14才くらいの少年が現れる（資料307番）。彼の証言に基づき，アルマンは逮捕され，取り調べを受ける。1757年４月27日づけの調書の中で，アルマンは自分にはこんな恐ろしいことなど言えるわけがないし，王を尊敬していると述べている（資料312番）。

拘留されている息子の身を案じて，アルマンの父は1757年４月28日付けで嘆願の手紙を出すことになる（資料320番）。

> （……）12才になります我が次男が，このように突然牢につながれましたことで非常に驚き，謹んでお慈悲におすがりして申し上げる次第です。息子につきましては絶えず目を配り，人様に後ろ指を指されることなどない，しっかりとした教育を施してまいりました。息子はまだ幼くてか弱い者でありますので，このように拘置が続きますと，後々によくない結果が生じる恐れがございます。それゆえ恐れながら，御許にひれ伏して，この父と子に，衆目の一致いたします殿下のお慈悲を賜りますよう，お願い申し上げる次第です。

取り調べが続行する中で，状況に新たな動きが現れる。アルマンの無罪が次第に明らかになっていくのである。どうやら冤罪のようである。捜査関係者の手紙からもそれがわかる（資料326，327番）。

> 貴殿と同じく，このアルマンは無実であり，恐ろしい言葉が彼のものとされたように思います。

そして，真犯人として，アルマンの言葉を聞いたと証言したバラン少年が浮上する。彼に今度は取り調べが向けられる。ついに彼は犯行を自供する。調書にはその証言が記載されている（資料337）。

> 自分の犯した罪を悔いながらバランはアルマンが無実であり，自分がこうした言葉を考え出したのであり，アルマンはそれを口に出してなどいないと言った。

こうしてアルマンの無実が明らかになった以上，彼を拘束しておくことは公正でないため，保釈に向けて手続きが取られていく（資料345番）。以後事件の焦点は，アルマンに代わって逮捕されたバランの方に移っていく。そしてアルマンの場合と同様に，息子のために嘆願の手紙を出すのは父親である（資料371番）。

> (……) 国王陛下のご命令に服しますこの身といたしましては，ガブリエル・バランが有罪であると考えざるを得ず，ご威光にひれ伏して，年輪のいかぬ我が子バランに御慈悲を賜りますよう，切にお願い申し上げる次第です。

この嘆願の手紙が効果を挙げなかったためであろうか，父親は1757年10月27日付けで第２の手紙を出すことになる（資料474番）。

> (……) こうして教育の機会を奪われていく一人息子を思って流す父の涙にお心を動かして下さいますように。13才の息子のことで罰を受けているのはこの私です。これまでずっと気持ちが動転してまいりました。息子はビセートルでとても素直です。どうかそのことをお聞きおよびになり，御慈悲を賜りわりますよう，切にお願い申し上げる次第です（……）。

この手紙を最後として，バランに関する事件は大きな進展を記されることもなく，記録からは消えていく。こうした小さな事件によりながら，ダミヤン事件が提起した問題を考えていこう。

２：揺らぎの王

上に述べたことからわかるように，このアルマンはもとより，バランですら犯人ダミヤンとは無関係である。いわばダミヤンが起こした事件の大騒ぎの中で，事件として官憲の目に留まり，検挙されていったにすぎない存在である。取調官たちも考えるように，もしダミヤンの事件がなければ，こうした子供の戯れ言など相手にされるわけはないのである。逆に言えば，それだけこの国王暗殺未遂事件は衝撃が大きかった。その大きさを当時の文脈の中から考察していこう。

当時王は単なる権力者ではなかった。王権にはある種の超越的な権威が中世以来付与されてきた。例えば，王による病の癒しなども聖的な力がその背景にあって考えられることであろう。確かに，時代が進むにつれ，霊的な能力が人々の意識から薄れて行くにせよ，王にオーラのようなものは漠然と感じられていたと思われる。ダミヤン事件を後に記述したメルシエにもその傾向は見て取れる。捕えられ，ベッドに固定された犯人ダミヤンを誰もが見物したがった様子をメルシエは描く。

> 彼（＝ダミヤン）のベッドの周囲には，無数の名士の姿が見え，その人たちは何か用心深く彼を取り扱っていた。君主に向かってあえて手を下しただけに，まるで鎖につながれた君主といった扱いだった。

(……) ある若い外科医がもぐりこんで，この王殺しを貪るように眺めていたが，ダミヤンのほうもその外科医の視線に気づいて，「あいつを逮捕してくれ」と言った。若い外科医は逮捕された。ダミヤンは，彼の好奇心を罰するために，ただ恐がらせようとしただけだ，と言ったが，その若者の心の中の恐怖心が激しすぎたために，恐怖のあまり死んでしまった。[5)]

君主が保持するような力をもつダミヤン，そしてその威光のもとに，若い外科医に尋常ならぬ恐怖を植え付けてしまう。王権に備わっていた能力がこの君主殺害計画犯にまで移行したかのようである。ここにおいても王権は単なる政治的な権力だけにつきるのではないことがわかる。

ただここで重要なことは，そうした宗教性が残存しているということよりも，その霊的な権能が揺らいでいるという事実であろう。今や王権はその基盤においてある変動に直面している。圧倒的な王たるルイ14世の後，摂政政治を経て王位についたルイ15世に，前王のような威光を期待することは難しかった。そして実際ルイ15世は様々な障害に遭遇することになる。経済悪化の状況は言うまでもない。さらにウニゲニトゥス勅書発布により，ローマ・カトリック界からジャンセニスムは圧迫を受けたが，その一派の権利と自由の問題を巡って高等法院と王権は敵対関係に入ることになる。王権の拡大に高等法院は批判的な立場を取り続けていく。王権の策謀ということでは，人々の間からは支配階級の間におけるイエズス会の隠然たる影響力の存在が指摘されていた。また当時フランスの政治政策においては，国王の愛妾たるポンパドゥール夫人の存在は決して小さいものではなかった。このようにルイ15世は，決して時代の中に超然としていたわけではなく，ジャンセニスム，高等法院，イエズス会，ポンパドゥール夫人などからなる様々の関係の結節点として現れる。王はその関係の揺らぎの中に立たされるのである。[6)]

3：父という問題

こうした揺らぎの中で，人々は安定を，少なくともその不安定さに対して毅然たる対応を王に求めてきた。しかし，そうした期待の機会をルイ15世ははずしていくように見える。人民の父たるべき存在である君主は，その子たる臣民に十分な形で答えることができないままである。こうしてフランスという枠の中での「親子」関係は張りつめていくのである。

緊張関係がダミヤン事件以前に現れたものとして，1750年に起こった暴動事件がある。この事件は官憲が不当に自分たちの子供たちを検挙しているという噂のもとに，パリで暴動がおこり，官憲の関連施設が破壊されたりした出来事である。その背景には，経済の悪化，重税の圧迫などへの不満，さらにポンパドゥール一派の専横への嫌悪などもあると思われる。しかし，人民たちの大きな批判は，そうした事態を放置している感のある王に向けられていた。錯綜した事態はやむを得ないかもしれない。しかしそうした境遇の改善に乗り出さない姿勢が人々の行動に火をつけたのである。だからこの暴動は，具体的な形では，疑惑のある官憲を襲撃するという形態を取ったものの，その根底には事態の悪化をくい止めるという手だてをせず，放置しておくルイ15世への反抗が存在する。[7)]

子供に加えられる暴力というイメージ，そしてその手を操る者として，人民の父たるル

イ15世の姿が浮かぶとき，この保護者の裏切りに子たる人民は蜂起したのである。人々の脳裏には恐ろしいイメージが形成された。子供たちをさらって，その生き血が取られる。それこそ不治の病に犯された貴婦人の唯一の秘薬になるというのである。こうしたイメージとともに人々の恐れと反感が形成されていった。[8] ただ注意すべきは，この人々の蜂起は決して王政否定といったものではないことである。その批判は，王その人を倒そうというのではない。自己の周りに悪のネットワークが形成されようとするのに，その傾向に抵抗する姿勢を見せないルイ15世の無策ぶりに非難が集中するのである。そうした不満の先に起こるのが，ダミヤン事件である。そのとき臣民たちが求めようとするのは，彼らに慈しみをもって接してくれる正当なる王の回帰である。

4：ダミヤン事件：結び目を求めて

ダミヤンは事件後ルイ15世に手紙を書いている。そこにおいても注目すべきは，彼の王への批判であろう。彼は効果的な政策や処置を行わないこの権力者に苦言を呈する。王その人を倒すのが目的というよりも，悪の元凶を身の回りに侍らせる君主への警告が彼の行動の動機のように思える。[9] 背後には正当な行為を行うべき主君というイメージとともにそうした至高の存在こそ受け入れたいという願望がある。適切な処置にふみきらないルイ15世に提言をすることは，正常な関係を求める交流の気持ちの裏返しである。良き父を求める願望がそこにはある。悪しき者の名を挙げ，指導者として断固たる措置を取ることを求めるのである。いわばこの事件は，君主にたいする人民の側からのコミュニケーションの希求という側面もある。王に対する臣民の呼びかけは，父たる存在への子たる者たちの訴えである。この事件を巡っては，父と子という枠の中で，解釈が行われていったように見える。父と子と言う解釈の格子があればこそ，先述のアルマン事件も重要性を帯びてくるのである。

年端の行かぬ少年が暴言を吐く。子たる者が父に向かって不遜な言葉を投げつけるとすれば，父子という関係の物語そのものへの侵犯となるであろう。アルマン事件があれほどの重要性をもって官憲の目を引いたのも，それが暗殺未遂事件の後で発生したということもさることながら，背景に親子の絆の保護という名目があったからではないだろうか。ダミヤン事件で揺るがされたのは，王と臣民との関係であり，それは象徴的には父たる君主と子たる人民との結びつきであった。ダミヤン事件を契機として，この繋がりを再構築していこうとする意志の前には，アルマン事件を見過ごすことはできなかった。

父子関係を揺るがす者には，断固たる態度で臨むこと，それが事件後人々の共通の認識であったように思われる。実際ダミヤン事件は，この象徴的親子関係再建のための，いわば最後の賭けであった。王に対する不信感がつのっていく中で，この災難をきっかけとして，父たる君主ともう一度関係を正常化しようという欲望が，意識のレベルでも無意識のレベルでも人々の心を支配したのである。ダミヤンはこの動きの中で，一身に悪を具現化し，供儀における犠牲の山羊のような役割を果たしながら，王の英雄化に一役買うことになる。

父たる役割の重要性は，アルマン事件においても，子の救済に身を捧げる姿からも知ることができる。救いにむけて直訴の手紙を書くのは，父親たちである。父が事態の処理に当たり，正常化を果たそうとする。王を父として位置づけ，そこから父子の交流の物語を

形成していこうとする動きは，この時期様々なレベルで現れる。事件後発表された王への詩編には，一命を取り留めた君主への神の加護を歌い上げる中で，ルイ15世を臣民の父として位置づけるものが少なくない。怪我が致命傷にならず回復したことを，ひとつの喜ばしき栄光として語りなし，王と人民たちの調和のとれた関係を描き出そうとする動きがそこにある。[10] この恐ろしい出来事を機会として，秩序回復を目指し，信頼を失いかけた君主をもう一度信頼の輪の中に取り込もうと言うのである。実際ルイ15世の健康回復後，それを祝う儀式がフランス各地で行われ，祝典の様子が語られていく。王への回帰を儀式というレベルで，多くの人々を動員していくことで，確認しようとする。[11]

ダミヤンの事件を契機として，善と悪の物語を語っていこうとする姿勢は，この出来事を分析しようとする著作にも現れている。これを契機として王国内の悪のネットワークを検知することが目指される。王の善性が確保される中で，悪がその外部に求められていく。悪の他者化という構図の中で，ダミヤンの共犯者が探求される。彼は単独で犯行を行ったのではなく，その仲間がいるはずであり，その関連を突き止めることで，王国における悪の体系の根絶が可能というのである。そのため，ダミヤン自身が共犯なしと証言するにもかかわらず，探索が続けられる。その中で当時の数々の派閥の姿が明らかとなる。イエズス会，ジャンセニスト一派，高等法院といった王に対抗する勢力などが話題となっていく。こうした様々な解釈を押し進める背景には，事件の首謀者をあぶり出し，その除去を行うことで，王国内の正常化が達成され，王と人民との関係もかつてのように調和の取れたものになるであろうという見通しが存在する。逆に言えば，それほど当時のフランスは各種のネットワークが混在し，錯綜していたのであり，それを透明化，明確化したいという願望が人々に共有されていたというわけである。[12]

5：物語の結末

真相の解明，秩序の回復，王との関係の正常化を目指して始まったダミヤン事件の捜査は，そうした願いを完全に叶えるには至らなかった。ダミヤンの共犯者を明確な形で検挙する事はできなかった。比較的早い審理により，ダミヤンに対して公開の処刑が行なわれるという結末が到来した。そして，事件後しばらくの間続いた王への熱烈な思いも，長続きはしなかったように思われる。以後王と諸勢力との対抗関係は続行していくことになるであろう。

一命を取り留めた君主も，様々動きの中に巻き込まれていく。寵愛を注いだポンパドゥール夫人が亡くなった後には，別の愛妾が出現し，また新たな語りが展開していくことであろう。もはやかつての様な父と子の物語は存在しがたいような事態へと向かっていく。[13] その先に見えるのは，周知の通り，フランス革命である。フランス革命こそ，旧来の父子の物語に代えて，革命という体験を共有する同士たちの兄弟愛を鼓舞しようしたのではなかっただろうか。封建的ではない価値観を志向するとき，そうした選択が取られたように思われる。[14]

そうした将来に向けての，重要な分岐点となるダミヤン事件を，今後別の方向から考察してみたい。冒頭に述べたようにルソーは，ダミヤンについて特に晩年の書簡において，言及するようになっている。そこでは，ルソーの被害妄想的とも言える「陰謀」のイメー

ジとの連関で考察されている。この思考体系を精神分析的な視点から論じるのとは別に，この事件が当時の社会に及ぼした表象面での影響を考慮に入れながら，ルソーの「陰謀」概念を分析する可能性が残されている。18世紀という時代が結びつけるダミヤンとルソーとの連関が，これからの課題である。[15)]

註

1）『ルソー全集』第３巻，白水社，1979年，363頁。
2）ルソーの晩年の妄想的なビジョンについては，1770年２月26日付けサン＝ジェルマン宛の書簡などを参照のこと。
3）ダミヤン事件については，特に下記の文献参照のこと。
Pierre Rétat (dir.), *L'Attentat de Damiens*, Presses Universitaires de Lyon, 1979.
Dale K. Van Kley, *The Damiens Affair*, Princeton University Press, 1984.
4）バスティーユ関連の資料については，下記参照。
Archives de Bastille, Manuscrits No. 11979 (618ff).
5）メルシエ，『18世紀パリ生活誌』岩波文庫（下），1989年，298頁。
6）例えば，この時代のジャンセニスムに関しては，以下参照のこと。
Monique Cottret, *Jansénismes et Lumières*, Albin Michel, 1998.
7）この暴動については，特に下記参照。
Arlette Frage et Jacques Revel, *Logiques de la foule*, Hachette, 1988.
8）こうしたイメージについては，下記参照。
Jacques-Louis Ménétra, *Journal de ma vie*, Albin Michel, 1998, p.34.
9）こうした見解については，下記参照。
Jean Viguerie, *Histoire et dictionnaire du temps des Lumières,* Robert Laffont, 1995, pp. 195-196.
10）例えば，*Ode sur la blessure et la convalescence du roi* などがある。
11）こうした行事は，当時の雑誌，*Gazette d'Hollande, Gazette d'Utrecht* 等で知ることができる。
12）事件を解釈しようとしたものとして，以下参照のこと。
Réflexions sur l'attentat commis le 5 janvier contre la vie du Roi.
Le patriote ou anecdotes secrètes sur l'assasinat de Sa Majesté, le Roy de France, commis par le détestable Damien, avec des réflexions à la fin.
Les Iniquités découvertes, ou recueil de pièces, curieuses et rares qui ont paru lors du procès de Damiens.
13）バリー夫人が登場して，また王の人生に波乱が起きることになる。
14）こうした歴史的な変化については，以下参照。
リン・ハント，『フランス革命と家族ロマンス』，平凡社，1999年。
15）ダミヤンとルソーの関係の一端については，以下の拙論参照。
「イメージ表象分析の試み」，『ステラ』，第18号，九州大学フランス語フランス文学研究会，1999年６月，61-82頁。

L'affaire d'Armand– Etude sur les relations entre Louis XV et le peuple

Yasuyoshi AO

Jean-Jacques Rousseau parle de Louis XV dans l'*Histoire du précédent écrit* en expliquant son projet de déposer ses manuscrits. Quand il s'agit du roi que l'on appelle le Bien-Aimé, nous ne pouvons pas étudier son règne sans faire la lumière sur un événement très important: l'attentat de Damiens.

Ce forfait horrible a exercé de grandes influences sur des domaines fort diversifiés. La police a fait tous ses efforts pour éclairer le complot de Damiens avant d'arrêter les coupables. Dans ces poursuites, apparaît l'affaire d'Armand. Ce garçon, âgé de 13 ans, fut accusé d'avoir prononcé des mots horribles contre le roi. Sans le crime de Damiens, cette histoire aurait pu être trop minime pour laisser des traces dans les archives judiciaires et policières.

L'importance que l'on accorda aux actes de ce garçon s'explique par les intentions partagées par les contemporains qui visent à interpréter l'outrage de Damiens du point de vue de la communication avec le souverain. Il s'agit de la communication entre le roi comme un père bienfaisant et le peuple comme ses enfants dociles. Pour surmonter l'horreur de cet événement on essaya de rétablir ces relations avec Louis XV qui perdait graduellement la confiance du peuple à cause d'erreurs politiques et fiscales. En effet après cet attentat, nombreuses furent les cérémonies qui fêtaient la guérison du roi blessé afin d'attester d'une unité totale et nationale.

Mais il convient de souligner le fait que cet essai de réorganisation sera mis en cause par la Révolution qui remplacera cette relation féodale par de nouveaux liens unissant les frères et les sœurs de la Nation dans les actes patriotiques.